



091654-000-8

特63-449

滑稽演舌會 (ちやんちやん征伐)

寒英居士 / 著

M27

DBO-0115



開會の趣旨

滑稽演舌會と申して強ちおどけた言ばかりを演舌致すの

事と考へ

中には随分骨もわり身もある演舌もある事と考へ

ぞ併し弁士は能くも揃つた落語家の向ふを張る人達ばかりと申して決して法螺を吹き立て、諸君に嘘言を云

譯では無い只演舌の仕方が滑稽と申すまでの事故此れ又

け一言断り申して置きます素より此會を開いたる趣旨

おどる喋々敷此で申さずとも既に、諸君の御承知の事

故直ちに弁士登壇と先は口上左様

會主に代つて

寒 英 述



酒  
石



滑  
靴





伐征んやらんやち

よせばよいのに李鴻章  
六  
どか漢どか頻りと西洋の人々から甘い名を付けられて居るが  
今度の事件に就ては全るで味附を附けて仕舞つた畏くも我大  
日本帝國を何んど心得たか卑怯未練のちやんく坊主め李鴻  
章を始めとして我れを嘗めて懸つたに相違ないナニ日本は國  
が小さいとかふんどかいつて自分の弱さは棚へあけふるし相  
場の大安賣で名もかい師を牙山へ上陸させた名がないからど  
いつて何も呼ぶに差支いはないが即ち所謂正しき大義名聞な  
き軍です彼奴は天津條約に依つてホンの印ばかりの通知をし  
て軍を出して仕舞つた何んたる無禮ものでせふ故に我兵士達  
は直ぐに又ちやんく國へ規則通りの通知をして朝鮮へ渡り

會舌演稽滑

ましたが已れデユ坊主めイザ戰場とふれば片つ端から薙き倒  
さすに置こうかど齒ざしりをして待つて居る中に愈々戦がね  
つ始まりました處で其結果を見れば老爺の胸筭當とは全く天  
地雲泥の相違にて日本帝國は大勝利ちやんく國は大敗北李  
鴻章は北京政府から罰せられて鳥の羽根とか何んどかを取  
上げられたとかで何んだ恥顔をかいたどの事で此後負ければ  
もつと罰則に照らされるどの事ですがよせばよいのに李鴻章  
夫れより念佛の一遍も余計に唱へて後生でも願ふの優れるに  
若かずたろうと考へます（ヒヤ〜傍聴者臍の皮をよらざる  
なし）

伐征んやちんやち

一千余人は徳利の眞似色

八

◎一千余人は徳利の眞似色 前世約束演舌

諸君よ諸君は彼の徳利の眞似色をれやりになつた事がありま  
すか是れは定めしない事でせふなせあらば此徳利の眞似色な  
るものは即ち一ツの徳利を取り 試に水中に入れて傍覽んな  
さいブク〜と音を發して泡を吹き仕舞には水の底へむ  
ぐつて仕舞います今若し人が水の中へはいつて此眞似をする  
時は是ころ 即 徳利の眞似色で傍座います故に諸君は徳利の  
眞似色はやつた事はあるまいと申すのです處が茲に彼のちや  
ん〜的がどんだ藝道をばやらかして遂に徳利の眞似色迄を  
やつて若も一千余人の多さに及びましたる事が出 体致しま

會舌演稽滑

した是れは即七月廿五日操江號の生捕となつた時に運送船と  
して雇はれたる高陸號に乗り組んだ清兵の豚尾共ですよせば  
よい事に纜かの給金に目が眩でノコ〜サイ〜朝鮮牙山へ  
向つて進む際に我軍艦の砲撃の爲め船は破壊され目を白つ黒  
して水を呑み〜前に申した徳利の眞似色を始めましたが是  
れは名高き豊島沖の海戦で傍座いましてた高陸號の沈没は其  
中の出来事です徳利の眞似色は其時の藝道ですだから中に面  
白かつたでせふあちらこちらと波のまに〜漂ひながら頭の  
尻尾をぶらさげて苦しむざははならば寫眞にでも寫して置い  
て後の参考にでも供したかつたものです併し無狀極まる事で余

一千余人は徳利の眞似色

九

所征んやらんやち

坊主を縛るゝ繩いらす

り感心した事ではありませんが此真似色はちやんく坊主に  
 は有り勝ちの事ですなせならば慾に目のない豚尾ですから人  
 の出来ぬ真似色迄もやらかすので汚座いませふ(大ヒヤク)  
 ◎坊主を縛るに繩いらす 奈氣伊太寸演舌  
 諸君よ私の演題は坊主を縛るに繩いらすと申すので汚座  
 います。が實に奇妙奇手烈な題だと汚考へもあさりませふが全  
 來坊主と申せばね寺さんの坊主と誰しも考へます。が私の申す  
 のは左様でない例のちやんく坊主で汚座いませふ此坊主中々  
 狡黠極まる人間で生捕になつても間がな隙があ逃げ出さうと  
 の考へのみで汚座い升から逃げられさうにと繩で縛つて

滑稽演會舌

置かなければなりません併し爰に至極丁法なるは頭の豚尾で  
 す周りをすつかり剃り上げてチヨンポリ残した毛で汚座い升  
 から引つ張れば痛いに極まつて居る其豚尾と豚尾とをつなぎ  
 合せる即ち甲の生捕の豚尾と乙の生捕の豚尾とお互に縛り合  
 せる然る時には動けば互に痛い頭の皿から毛が抜けて其處が  
 ら血が吹き出す仕末になるかも知れない素より怖氣なちやん  
 くです。だからこんな間根は出来様等もなくつまり縛られたま  
 ゝで其處にねどおしく居るより外仕方がない事です其れ故に  
 生捕つた人間達は別に繩を以て縛るに及ばん至て丁法な譯で  
 すが縛られた當人は中々痛い事です。其さまころは豚尾漢が

坊主を縛るに繩いらす

伐征んやちんやち

逃る奥の手

生々恥さらす珠數續きの奇手烈な手品の種にでもなりそうであ  
りませふ（喝采大喝采中には頤を解つしき骨接きの厄介を  
かけし者もありしと云ふ）

十二

◎逃るは奥の手

蘇良出多演舌

諸君よ私は蘇良出多と申すものにて前弁士諸君の如き能弁家  
にもあらず又雄弁家にもあらず私は一の唎辨家で滲座います  
故口から幾等出放題の事を申すにもせよ滲聞き苦しき事を存  
じ升が暫時御清聴を願ひ升演題は即茲に筆太々に書き記し  
滲座います通り逃るは奥の手と申す題にてやはりちやんく  
的の事に就て一言申し立て否な饒舌り立てるので滲座います

會舌演稽滑

一体私に見る處では今迄の經歷に徴し考ふるに（滑稽弁士今  
少しく漢語の口調は止めべしと叫ぶ者あり）（弁士暫らく啞然  
たりしが再び語を發して曰く）飛んだ御忠告恐縮千萬です  
がまづく暫くく御静にチソレ願ひ升ヨオホン諸君見ずや  
又聞かまや豊島に成歡に牙山に平壤に海洋島に九連城に鳳凰  
城に金州に旅順口にまだく戦ひのあつた處は澤山あります  
が何時もあから日本の大勝ちにて清兵は大負けです處で清兵  
は何れも必死となつて戦死したる人は澤山あるかといへば  
立籠つたる兵の割に少ない然らば如何致したかと云へば多く  
は逃げ出す者共ばかりつまり兵法の奥の手は何んだと清兵に

逃るは奥の手

十三



伐征んやちんやち

爺の脛も足らぬ平壤

十四

聞けば逃げるが勝ちと云ふで彦座いませぬ古の諺に三十  
六計逃ぐるに若かずと申す事が彦座いませぬが豚尾兵は是れを  
堅く守つて飛んだ兵法の奥の手を出し逃げ出すので彦座いま  
せぬ夫れ故に大事な戦も何時も大負けとは外聞の悪るい話し  
だが又己むを得ざるの事でせぬ御判断は諸君の胸中にて任  
せ申すとして先づ降壇と致しませぬ(拍手笑聲鳴りも止まず)

◎爺の脛に足らぬ平壤 又負野綱演舌

諸君よ諸君彼の爺の向ふ脛を彦承知で彦座いませぬか随分此脛  
にて蹴れた時にはおたまりこふしない事で急所にでも當ると  
目でも廻すか氣絶するか負傷のない事は彦座いませぬ併しな

滑稽演舌會

から蹴る爺の身にとつて見れば實に容易な事で足を揚げてウ  
ンと蹴上げれば夫れで宜い事何のうさなき事ですが此話し  
と全し事今我大日本國の軍隊が平壤を陥れたる有様は爺の  
向ふ脛にも足らぬ程で時は九月十五日等しく城の四面を圍み  
ましてちやんく戦ふた末十六日の曉に難なく攻め落しま  
した此時進軍の手分けを一寸滲話し申らうなら本軍は即ち曉  
勇の聞へ高き野津中將右軍は立見少將にして左軍とありて進  
んだるは彼の成歡牙山の戦ひにて既に其名を轟かした大島少  
將別働軍は大迫少將で此等の大將方が四方から攻め立てたの  
ですからちやんく坊主の弱虫には到底拒ぎおしせる事は六

爺の脛に足らぬ平壤

十五

ちやんやちんや征伐

蘇の歴に足らぬ平壤

十六

ケ敷話して涉座います此戦争では敵の大將左寶貴以下死んだ  
り負傷したりした者も澤山ありますが生捕りの多いとも非常  
な物で涉座います其外分捕品は山を築くばかり其分捕品の内  
で支那人ではないが金目な物に就すしますれば(ちやんく  
坊主の如く金に目がくれて金目な物の事を殊更に言ふにあら  
ま唯其有りの儘をすすなり)金や銀の塊を入れたる目方は  
凡ろ三十五貫目余の箱が四十個韓銭が六万七千貫もありまし  
たが是れを十露盤に當つて見れば金塊は六十三万圓余銀塊は  
十九万圓余韓銭が十三万圓余メて九十五万五千二百圓余でム  
います此金を捨てて死んだり生捕になつたりした豚尾共です

滑稽演舌會

から定めし惜しい事でありませふ死んだ者の亡魂はまたどこ  
かに迷つて居るかも知れ生きている者は寐言にても言ふで涉  
座いませふ先づこんな事は兎に角として此平壤の要害のよき  
事に就て一言陳べ余り永なると御退屈様故演壇を降うと思  
ひ升へユツプの水を呑みまし一息ついて又説き出す(諸君よ  
平壤は前には大同江の流れを扣へ後ろに大城山の峰ついき隨  
分險阻な處です茲に立籠つたる兵士は幾万かの大軍實に攻め  
るは困難極まる處昔し大閻様が明國を攻めます時に名代いの  
小西攝津守行長が此城を攻めましたが攻めあぐんでどうく  
落ちなかつた處昔しからの暗險とか天險とか云ふ土地で涉座

蘇の歴に足らぬ平壤

十七

當つて碎けた威海衛

います昔むかしの小西こにし攝津守しやうしんのかみは是處こゝを攻めあぐんで破るに困難こんなんした  
たが今いまの大將方だいしやうかたは一晩ひとばんに攻め落した小西君こにしくんも地下ちかで流石りやうじはぬ  
らぬと賞はめて居るで汚座けいざいませふが何なにに致いたせ斯かくの如ごとく要害やうがい  
のよき平壤へいじやうらんを忽たちちに攻めつふしたのであれば爺おやの脛すねに足らぬ  
平壤へいじやうらんと云ふのも強ちやうち理りのなき事ことではありますまへへ「ヒヤ〜  
拍手たしやうの響うりやうき満堂まんたうに震ふるふて壁かべも頽たふるゝばかり天井てんじやうも抜ぬける斗とを  
り

◎當つて碎けた威海衛 浮無瀬無志演舌

諸君しよくんよ世よの人がやすには當あたつて碎くだけるとよく言いひ升のぼりが私わたくしに  
はなんの事ことか薩張さつちやうり解わかりませんが先まづ先方せんかたへこちらこちらが當あたつて

滑稽演會舌

見て碎くだける物ものなら碎くだけると云いふ事ことでありませぬ處ところが私の演題えんたい  
の當あたつて碎くだけた威海衛かいかいとは日本の軍艦ぐんかんから放はなした直徑ちきやう二尺にじやくも  
ある大おほき砲ぱうの丸たまごが威海衛かいかいの砲臺ぱうたいへぶつかつて其玉そのたまごが當あたつ  
て碎くだけたる威海衛かいかいの砲台ぱうたいと云いふ事ことなのです其れ故ゆゑ其そのの中で云  
ふ當あたつて碎くだけると云いふ言葉ことばとは少すこしちがいます去されば諸君しよくん其  
腹はらにてれ聞きき下ください頃は十月十日じゆがつじゆじちの朝あさ威海衛かいかいにある敵てきの艦隊かんたい  
を撃うちたんが爲ためめ我が軍艦ぐんかんは是れに向むかひました處ところが豈あに圖はからん  
敵てきは例れいの臆病おくびやうやつばら威海衛かいかいのなかへむぐり込こんで居ゐて一寸  
も出でて余あまりませぬ其れのみならず其中そのなかにある敵艦てきかんはあはてく  
さつて渤海灣へいけいわんへスタコラ逃にげ出だしました我艦隊わがかんたいは誠まことに力ちからが落おち

當つて碎けた威海衛

伐征んやちんやち

當つて碎けた威海衛

二十

ましたなせさらば折角敵の艦体を打ち敗らふと思ふて居たに  
袋をかぶした猫同様後へさがるか逃げ出すか斗り故意氣迄も  
水の泡となりました然る處威海衛の砲台から忽ちツトンと我  
艦目がけて大砲を撃ち出しましたからこいつ一番砲台でも打  
ち碎いて歸るふと夫れから一時間斗り互に戦をましたが敵の  
丸は一ツも當りません併し我軍艦より打ち出す丸には敵の砲  
台も碎けるむかり是れ等の丸が度々當つた故終に砲臺も碎け  
ました我艦隊は是れを認めましたから是れを引き潮と思ふて  
悠々と歸りましたちやん／＼船は一隻も追ひかけようと思せ  
ず威海衛や渤海灣で耳を塞いで桑原／＼と唱へ居つたとはさ

滑稽演舌會

て／＼哀れな艦体では汚座いませんか是れでも日本と戦を  
しようとは氣でも違つたか譯の解らん坊主達では汚座いませ  
んか(ヒヤ大ヒヤ拍手大喝采)

◎黃海沖の豚のお化け 伊久佐氣雷演舌

諸君よれ化けと云ふ者は昔から話しに致しますがまだ見た人  
も汚座いせん併し大概れ化けと云へば白い着物でも着で細  
い手を出して足のない頭の毛の長い骸骨みたような色の青さ  
めた人がウラメシヤとでも言つて出るので汚座いませぬ繪な  
どには随分かいたのが汚座います私申すお化けの話しは是  
等と一種事變り豚のお化けで汚座い升其の出處はどこだと云

黃海沖の豚のお化け

二十一

黄海沖の豚のお化け

二十二

へば是れと大孤山のもより即ち黄海の沖で汚座いますと申し  
 て此處へ豚のお化けが出るかといへば是れは九月十七日以後の  
 事此處に日本軍艦十一艘と清國軍艦十二艘水雷艇六艘との  
 間に古今未曾有の船を戦さが汚座いたしましたが此の位の戦さは  
 是れ迄世界にあまりない程の大戦さです汚存じの通り日本は  
 大勝支那は大負け軍艦は二三艘沈れられ爲めに人死にも澤山  
 汚座いたしましたが孰れも是れは海の藻屑となつて仕舞いました  
 全体命惜しみの支那人故死んでも中々死にきれまいと考へま  
 す雨につけ風につけ曇つた天氣につけ浪の間に死にともない  
 どの聲が聞へるかもしれませぬ併し實に是等が出たら所謂豚

のお化けです昔しからお化けると申せば又豚のお化けもな  
 いとも限れない諸君は如何お考へられ升か(満場臍をよる)

◎清兵捕虜は黒闇の牛 無茶苦茶演舌

扱て諸君よ諸君は清兵の捕虜とあつたる者が新橋ステーション  
 へ着いたのを汚存で汚座いますか中には汚承知の方もあり  
 り汚承知のない方も汚座いませぬ今私しの見た所で一寸汚談  
 しやうらなら其風体其さまといふものは丁度黒闇から牛を引  
 き出したようかものでしたなる程其筈でせぬ彼奴等は野蠻の  
 闇黒世界から此文明の光りある日本へ参りましたのですから  
 見るもの聞くもの耳新しく目新らしくない物はない果ては唯

清兵捕虜は黒闇の牛

二十三

伐征んやちんやち

清兵捕虜は黒闇の牛

二十四

キヨロくとして自分か捕虜の身をも忘れ忙然として居る位  
のもので何れにしても碌な物ではない實に人間と生れて豚尾  
くといはれ人より嘲弄るゝは情ない話しではありません併  
し私が黒闇から引き出したる牛の如しと云ふたは其狀を見て  
一言形容した迄の事で多座います(ヒヤ〜)

明治廿七年十二月廿二日印刷  
明治廿七年十二月廿一日發行

著 者

神田區柳原河岸第十一號地

天

野

鑿

發 行 者

日本橋區通り三丁目十番地

野

村

銀

次

郎

印 刷 者

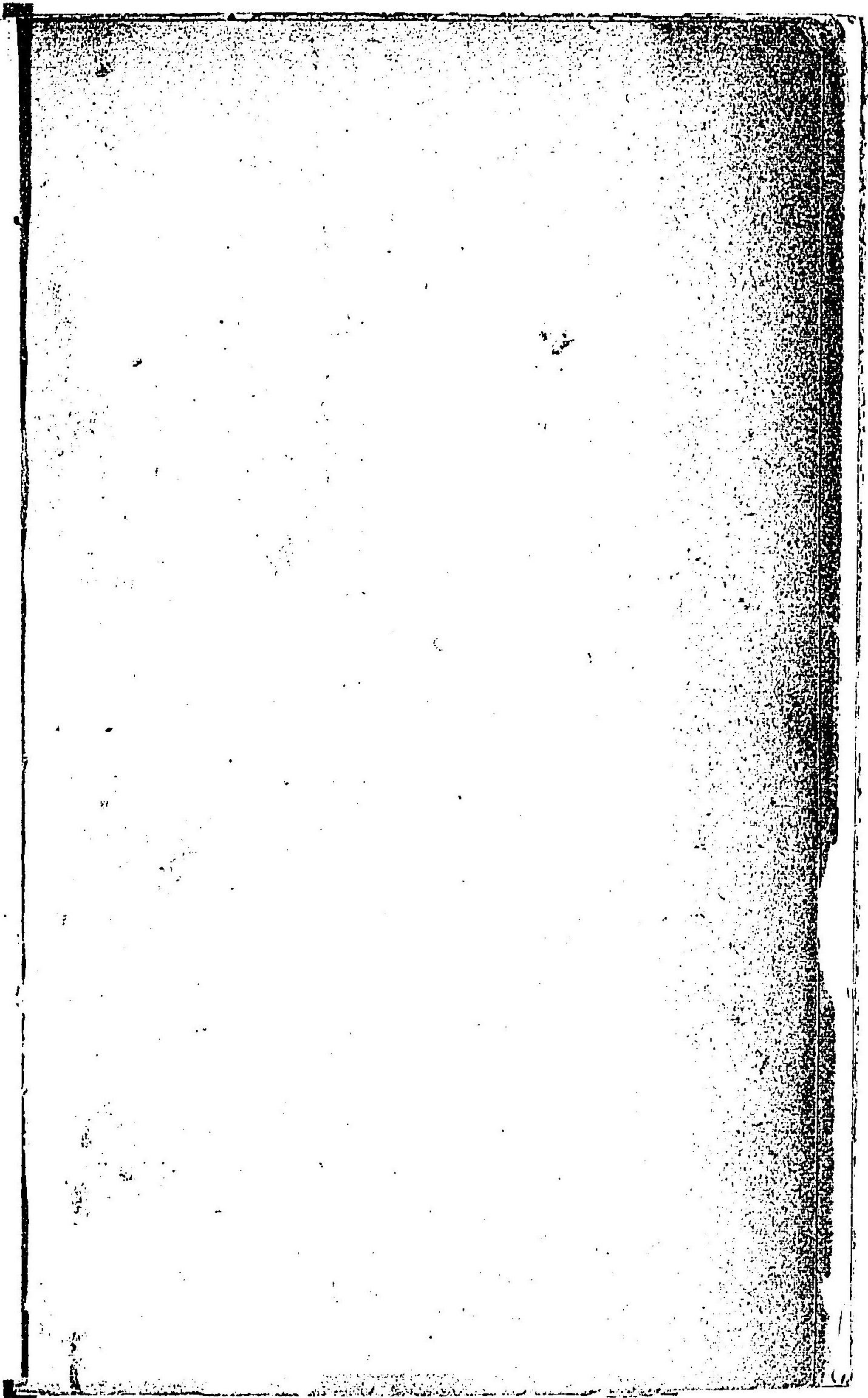
龍雲堂

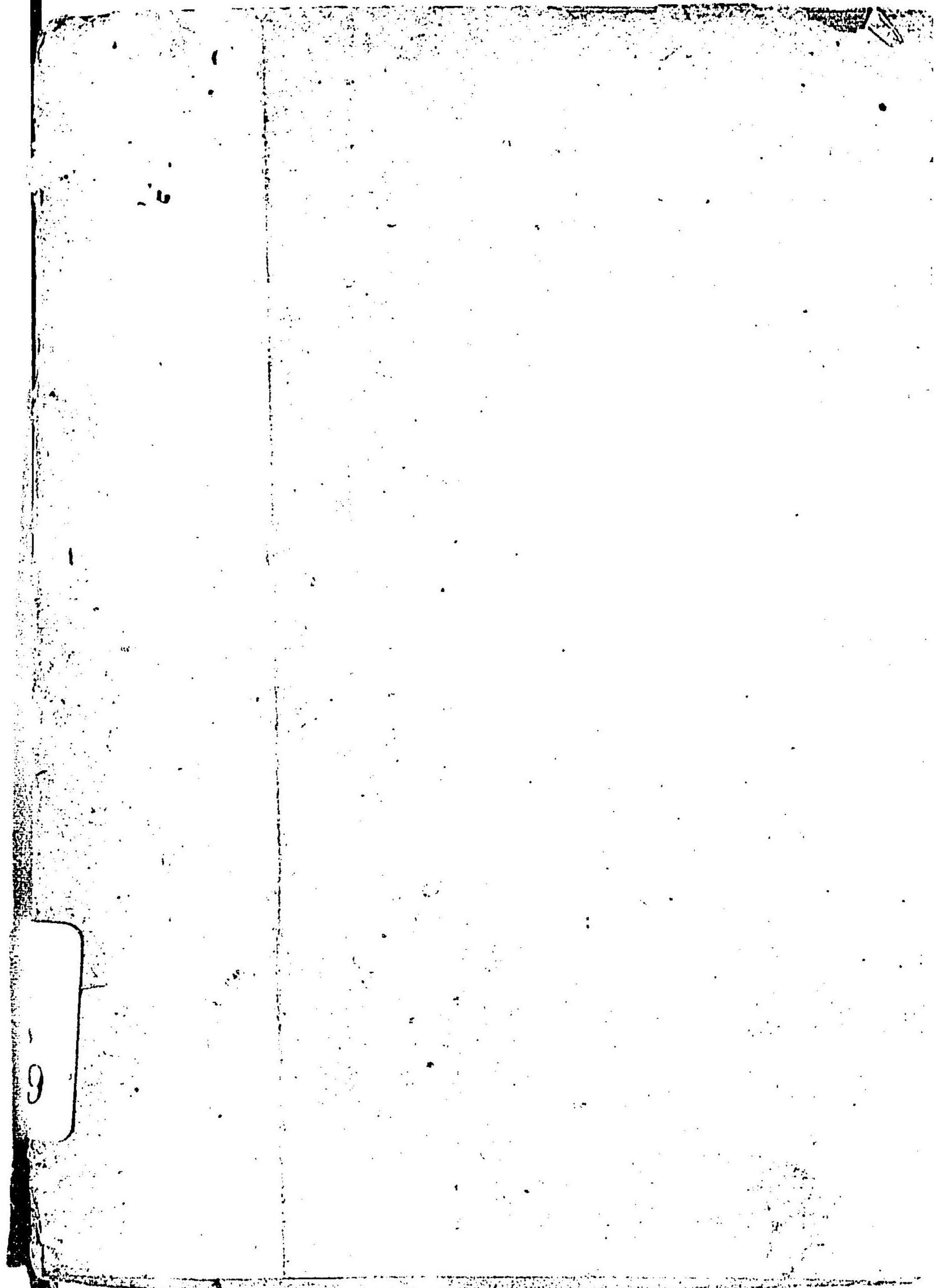
大

場

沃

美





9